

モンスターな俺は鎧武に変身する。

猫舌

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

謎の声と会話していたらいつのまにかダンまちのウィーネにされていたTS主人公がわちやわちやする話。

目次

プロローグ	1
弱者	5

プロローグ

《君は何を望む?》

……ここはどこだ?

見えてる範囲でも真っ暗だが。

…あたりを見渡そうと首を回そうとするが、なぜか動かない。

いや、そもそも首…というか体の感触がねえぞ!

どーなってる!

《君は何になりたい?》

「ああ?何になりたいって…答えるとなんかいいことでもあんのか」

《今なら君の望む姿…もしくは力を上げられるよ》

そして目の前(真っ暗で何も見えんが)からは胡散臭い声が聞こえる。

怪し過ぎるな。

誘拐か?にしては質問の意図がわからん。

「…なんでだ?俺は特にお前のメリットになるようなことはしていないが」

《君の記憶に興味深い物を見つけたからね。そのお礼だよ》

何言ってるんだこいつ。

記憶を覗くなんてできるわけねえだろ?

…だが、仮に断ったところで俺の状況が改善されるわけでもないか。

まあ、多少話に付き合っつてやれば解放されんだろ。

適当に話を合わせますかね。

「なら、仮面ライダー鎧武にしてくれよ」

《鎧武…君の記憶にあった奴だね。うん、いいよ。ちよつと調整するから待ってね》

「は?」

…マジで言ってるのかよこいつ。

調整つってたが…まさか俺の体を弄る気か!?

ってか、俺の体がピクリとも動かないのは…まさか既にいじられて

るからか！

それに、鎧武ってオーバーロードとか言う人外に最終的になってたし、拡大解釈で人外化されたら困るぞ！……改造人間になるのはともかく、味覚がなくなるのは勘弁だ。

「ま、待った！オーバーロード化は勘弁してくれ」

《うん？ああ、わかったよ。ヘルヘイムの果実だけしか食べられないなんて寂しいのかな？》

「うるせ」

《他に要望はあるかい？大方ステージの調整は終わったけど》

案外物わかりがいいのか？

それとも俺をただ揶揄っているだけなのか？

わからんが…設定を考えるのはちよつと楽しくなってきたな。

「ステージが整ったつてことはヘルヘイムの森、もしくはヘルヘイムの果実が存在する場所に俺が行くわけか？」

《後者が正解だよ。実際は似せたものがあるつてことになる》

「戦極ドライバーはどんな感じで存在してんだ？」

《君がダンジョンの壁に触ればそこから形成されるようにしたよ》

「ダンジョン…ははあ、そう言う系な。ゲネシスドライバーも同じ仕様か？」

《そうだよ。壁に触れる時に念じれば、どちらかのドライバーかを選べる》

「エナジーロックシードやカチドキとかはどうなっている？あと、黄金の果実」

《それは追々追加する予定。今のところは、エナジーロックシードはないし、カチドキもまだ。黄金の果実は……ダンジョンの奥深くに眠っている感じだよ》

…あーストーリー解放すると同時に解除されるスキルツリーのよ
うなものか？

それか、新しい街に行くごとに武器のグレードが上がるような感じ
だろうか。

「仮に完成したとして、そいつらは外見で違いがわかったりするの

？」

《そうだね、その方がいいかな》

「りよーかい。もう聞くことは特にねーな」

《お、もういいのかな？》

「…あー最後に、俺の体ってどうなってる？」

《…人型にはしておいたよ》

は？…なんか不穏な空気が漂ってんぞ!?

「おい、そりやどう言う…」

《それじゃ、付き合ってくれてありがとうね!》

「説明しろよ!」

そいつは最後の最後で

俺を突き放し、俺の意識は絶たれた。

【side out】

地中の奥深く。

いくつもの道が錯綜する広大な地下迷宮。

その一角で壁面に亀裂が走り、新たな生命が誕生しようとする。

ビキリ、ビキリと音を立ててダンジョンの壁を破り、最初に現れたのは、青白い肌の腕だった。

すぐに同色の肩、首、頭部、次には一気に身体全体が出て地面に落ちる。

四肢を持ち、女性を彷彿とさせる滑らかな線を描く人型の体軀。肩や腰を始めとした部分的に生え渡るのは無数の鱗。

腹部には黒を基調としたベルトらしきものが巻かれ、場違いなものであると主張していた。

頭部から伸びる青銀の長髪を揺らし、倒れ伏した体勢から、ガバツ、と勢いよく起き上がる。

額に美しい紅石を埋め込んだ1匹のモンスターは、困惑に満ちた瞳

で辺りを見渡し、次に自身の体を見下ろす。

細い喉が、大きく震えた。

「な、なんじやこりやあああああああああああああああああああ!?!」

弱者

「ムカつくぜ…今度会ったら一回める」

何をどうしたら男の体がこんなモンスターチックな女の子になるってんだよ。

しかも産まれたてで頭がぼんやりするときた。

そのせいか、

俺が今まで何してたかっつてのが思い出せん。

仮面ライダーを知っていたっつてことは少なくとも文明人ではあるはずだがな。

「はあ…いつまでも愚痴るわけにやあいかな」

とにかく今はあのヘルヘイムの果実を探していつでも武装できるようにしねえと危ねえ。

実際、同じモンスターだから言葉が通じると思い熊に話しかけたら襲われたしな。

普通に共食い…いや種族が違うから一概にそうは言わねえか。

このダンジョンと思われる場所ではどうやら戦わなければ生き残れないようだ。

さっきの熊の時は運良く冒険者っぽいパーティに押し付けることができたが……なんか、あいつら俺に超ビビってたんだよな。

く回想く

『グオオオオオオオ！』

「うおおおおお!？」

そこのお前らあつ！助けろおおおお!!」

「なつ、モンスターが喋った!？」

「嘘でしょ!？」

「なんでもいいだろそんなこたあ！

つて訳で後は頼んだ!」

「はあ!?!モンスターが

パス・パレード
怪物進呈かよ!」

「ど、どうなっているのお!？」

『グオオオオオオ!!』

く回想終了く

まあ、モンスター押し付けたのはどう考えても俺が悪いんだが、ひとまず置いておく。

ひとまず、喋るモンスターは珍しいってことはわかったな。

諭えんなら、ドラクエとかで井戸の中にいるスライムとか、ボスクラスのモンスターとかだろう。

「つてことは俺、結構スゲーモンスター？」

外見からはそうは見えんが。

特別なモンスターって意味なら、鎧武に変身できる俺は充分特殊で特別だろうーな。

「まあ今んところ変身できねえが…」

今の俺はホイミが使えない

ホイミスライムみたいなもんだ。

さっさと見つけて…げっ、モンスターだ。

なんか炎纏っててカッケェーが俺にとっては死の鳥にしか見えんぞ。

逃げるが吉。

戦う術見つけてからひと狩りしようぜ。

く移動く

…あ、あつた…!

やっと見つけたぞオラアツ!

木の影とか見つけにくい場所に自生しやがって!

お陰で何度襲われたことか…!

しかも途中でモンスターだけでなく人間にもおそわれたしな!

モンスターの脚力を生かして逃げ回ったおかげでなんとか撒いたが…。

あの目。

俺を性的に舐め回すような視線は初めてだぜ…。

まあ、確かに今の俺の体は女みてえだが…うう、気味が悪い…。身の毛がよだつてのは、

こういうことを言うんだなあ…。

(お陰でちよつと漏らしかけ…いやなんでもねえ。

なんでもねえつたらねえ!)

「だが、これでようやく変身ができる…!」

3つしかないが、

それでもないよりマシだぜ。

対抗手段があると無いとじゃ大違いだ。

「まず一つ」

ブチツともぎ取ると、紫の色彩をした果実は光を放ちながら錠前へと変化。

「これは…」

記念すべき最初のロックシードはパンダみてえな色合いしたヒマワリだった。

最低ランク。

確か、ベルトにつけて栄養補給にしか使えんクソ雑魚なめくじだった筈。

一応インベス召喚はできると思うが。

ここのロックシードも同じ仕様かは知らんけどな。

「二つ目…ど、ドングリかよ…」

なんとも微妙な…。

なんていうか、ネタ度に欠けるといいうか。

これで二連続ヒマワリとかだったら大いに突っ込めたのだが…なんとも言えん。

変身できるが、俺の力量で扱えるかは分からん。

そもそも、武器の時点でリーチが短すぎるしな。

扱いにくいことは確かだろう。

「最後だ…頼むぞ…!」

最後の果実をブチツともぎ取る。

……そして現れたロツクシードは……！

「たんぽぽお……」

オイオイオイ。

まあヒマワリよりはマシだけでもよお。

「俺に操縦できるのか……？」

問題はそこなんだよなあ……。

バイクにすら乗ったことないのにいきなりこんな空飛ぶやつに乗るとか無理難題だろ。

しかも戦闘しなけりゃいけないときた。銃撃できるから大抵のモンスターなら穴だらけだろうが……方が一人間に流れ弾が当たったら即死レベルだから迂闊に使えねえ。

「え、俺鎧武じゃなくてグリドンになんの？」

ウツソだろオイ。

だがないよりはマシだよな。

その内オレンジロツクシードを手に入れたらその時改めて変身すりゃあいいさ。

「……ここは群生地じゃあねえみたいだな……違う階層に行ってみるとするか」

仮にもアーマード・ライダーなんだから、スペックゴリ押しでも人型相手なら多少はなんとかなんだろ。

どうにもなんねえ場合は……。

タンポポに乗って逃げるか。

ってかそれしかねえ。

この木の根があちこちに広がる足場最悪な所を走るよりは早く逃げられるはずだ。

「……さて、そろそろ行くか……」

いつまでも留まってちゃまたあいつらややけに追いかけてくる火の鳥に見つかっちまう。その前にさっさとここから離れるとしようじゃねえか。

……ん？

なんか羽の羽ばたく音が聞こえたような…。

『グウエエツッ!』

「なっ、見つかった!？」

嘘だらろなんでだ!？」

いや、んなこと考えるより!

「に、にげねえと!」

そう言つて足を踏み出した瞬間。

「うわあっ!？」

木の根に足を引つ掛けた。そのせいで下り坂をゴロゴロ転がつちまっただぜ…。

「痛つつ…つて本当に痛てえ!？」

……まさか…これ、足を挫いたのか…?

嘘だらろ…?

た、立ち上がれないって相当だよな!？」

オイオイオイオイオイ!

ヤベーよ!どうすれば…!？」

「つてそうだ!」

ヒマワリロックシード…無い!？」

さっき拾ったやつ軒並み落としちまったのか!？」

探せばまだあるとは思うがこの足じゃ…!

つてか、あの鳥は追っかけて来て…。

「……………あ」

『ゲエツ…ゲエツ…』

俺がさつきいた場所から見下ろすようにこちらを見ている。

無駄に横に長い目がしつかりと俺を捉えて…。

「ひっ…く、くるなあ!!」

俺の叫び声を見無視して飛びかかって来た。

なんとか体を捻つて体当たりを回避。

「っああっ!」

激痛が走った。

そりゃそうだ、

足挫いてんのに無理して動きやあこうもなる。

「お、おい！くるな、こつちに、俺のそばに近寄るなっ…!!」

蹲った俺を見たモンスターは絶好の機会と言わんばかりに大きく口を開き、火の鳥らしく口の中に炎を溜めている。

(近寄らなければいいって話でもねえよ!?)

俺というモンスターの皮膚がどれほど炎に耐性があるかわからねえ以上、こいつの一撃を喰らうわけにはいかねえんだよ！

ああ、くそっ動けっ！

恐怖で体が動かないよりはマシだろうが！

「うあああああ…っ」

自分でも信じられない情けねえ声が出た。気合いを入れて叫んだつもりだが、やけに弱々しい。

「あああああああ…」

俺の頬に水のような何かが伝った。

汗…じゃねえな…これ、まさか…。

「な、泣いてんのかよ…おれえ…。」

——ああ、こりや駄目だ。

頭の中で冷静な俺がそう呟く。

——うるせえうるせえ！俺はまだ動ける！

——無駄だ。どれだけ奮い立とうとしても、心の芯がポツキリと

折れている…涙がその証拠。

——黙れ！黙れ黙れ黙れえ!!

「こんなところで終われるかよ！

呆気なく散れるかよ！

俺はまだ——生きていたいんだよお！」

(立て。立って…！頼む、俺の体！)

お願いだから…この攻撃だけでもお…！)

だが、火の鳥のモンスターはそんなこと知らぬ存ぜぬと炎を吐き出す——。

「やめ、ろお！」

——寸前、モンスターの首は胴体と別れを告げた。

火の鳥のモンスターは断末魔をあげる間も無く生き絶える。もう、恐怖は感じない……。

…いや、トラウマって形で残ってやがる。

くそっ、まだ震えが止まらねえ…！

「だ、大丈夫？」

そんな俺に、さつきモンスターを切断した白髪で赤目の少年が話しかけて来た。

軽装であり、手元にはこいつの獲物と考えられるナイフが握られている。

「……………あ」

…くそっ、さつきの啖呵が限界だったらしい。

声すら出ない。小さな呻き声が精一杯だ。

だが、

どうしても言っておかなきゃいけねえこともある。

「……………ありがと……」

「…うん。もう、怖く無いよ。安心、してね」

俺の見た目にギョツとしつつも、白髪の少年は俺に布をかけ、その上から抱きしめてくれた。

（あったかい…）

よかった…どうやら伝わったみてえだな。

へへッ…すっかり誰かにお礼を言えたのは…いつぶりだったかなあ。

…覚えてねえや。

そもそも記憶が抜け落ちてるしなあ。

（ああ…これヤバイな…）

安心感が段違いだ…眠い…）

そのまま俺は、白髪の少年の暖かさに溺れるように意識を暗闇へと落としていったのだった……。